

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: 80%;"> <b>日本精神保健看護学会</b> </div> <p style="text-align: center;">-The Japan Academy of Psychiatric and Mental Health Nursing-</p>	ニュースター 第29号 平成12年9月18日
	事務所：〒113-8622 文京区本駒込5-16-9 日本学会事務センター (理事長 武井麻子) TEL：03-5814-5810 FAX：03-5814-5825

## 第10回日本精神保健看護学会 総会・学術集会を終えて

平成12年6月3日、4日の両日、第10回学術集会が福島県立医科大学看護学部で開催された。初めて関東地域以外で開催されることになった今回は、中山理事長と数人の学会員しかいない福島の現状もあり、準備段階から福島県内の臨床の方々と意見交換を重ねながら進めてきた。

このような経緯の中、「看護理論とその精神科実践への適用」というメインテーマで二人の講師を招き、兵庫県立看護大学のパトリシア・アンダーウッド先生には6月3日に“セルフケアモデルと日本の精神科看護への適用”について講演していただき、またこれに引き続き、福島県の竹田綜合病院からの事例を、セルフケアモデルを用いながら考えるという、ケースプレゼンテーションが行われた。日本においても施設内で管理する精神医療のあり方から、リハビリテーション、障害をもちながら地域で生活することが推進されている現在、患者の自己決定と症状等に対するセルフケアが可能になるよう援助することが看護者の役割として重要であること等が強調された。

翌4日には英国Newcastle大学から招いたフィリップ・J・パーカー先生に“人間関係の理論と精神科看護実践”として、人間に対する関心を寄せること、ケアリングの実践ということが看護者にとっていかに重要であるかが強調された。

初日の午前中に行われたワークショップでは、第9回からの「呼吸法とリラクゼーション」を含む9テーマに加え、パーカー先生による「英国の地域精神科看護システムとクリニカルスーパービジョン」と、福島県内の臨床からの要望を受けた「精神看護臨地実習の展開」の計11テーマで実施された。

また、今年的一般演題発表は40題と例年より多く、7会場に分かれて行われた。看護教育、精神科病棟での慢性期や急性期の看護、地域での精神保健など、様々な演題が寄せられたが、研究というよりも活動報告レベルのものもあり、アンケート調査は研究の質を問うべきではないかとの指摘がされていた。演題に対する査読等を今度どうしていくか、検討する必要性を感じた。

福島での開催だったが、遠くは沖縄からと、会員172名、非会員・他287名、合計459名の参加があった。交通の不便さを指摘される一方で、緑の山々に囲まれた環境を歓迎してくれた声も得られた。当看護学部で行う初めての学会に、学内の教員自身も何かと不慣れで、戸惑うことがあったが無事終了しほっとしているところである。

来年はいよいよ新世紀、当学会の新たな飛躍を願い、第11回学術集会の企画委員の方にバトンタッチする。  
 (第10回学術集会実行委員 大竹眞裕美)

### ———— ワークショップ主催者・参加者の声 ————

ワークショップ

「英国の地域精神科看護システムとクリニカルスーパービジョン」からの報告

萱間 真美 (東京大学)

パーカー博士にとっては今回が初めての来日であり、かつ日本の精神科看護者への講義もこのワークショップが初回で、赤い木靴とおさげにした長い髪というチャームでリラックスした様子からは想像しにくかったかも知れませんが、少し興奮気味でした。そして通訳を務めた私もまた、とても緊張しておりました。

英国は国営医療システムが長いこと機能しており、画一的ではあっても無料でサービスが受けられることをセールスポイントにしてきた高福祉国でした。しかし昨今の経済状況の変化から、サービス

もエージェンシーとして法人化され、地域の特性を反映するようになっていきます。そのため、同じ英国国内であってもサービス提供の密度やマンパワーには温度差が生じています。クリニカルスーパービジョンは、看護の質を高める関わりであって、チームの中にあっても実際の業務は単独で行わざるを得ない英国の地域精神科看護婦にとっては必要不可欠なサービスとなっています。しかし、地域のマンパワーや経済状況によってスーパービジョンに携わる人材も、頻度も大きく異なることをパーカー博士も強調しておられました。

クリニカルスーパービジョンの機能は、教育的機能、感情サポート、そしてケアの水準を維持することの3つであり、スーパーバイズする側とさせる側の双方が、その機能を中心として関係性を組み立ててゆくことに同意していなければ、双方に不全感が生じることになるとパーカー博士は述べました。私自身、実際に数カ所の病院や保健所でクリニカルスーパービジョンを行う機会がありますが、対象者の方と目的を明確にし、限定し、確認するという作業をしてこなかったことに気づきました。限界設定をしなければ、お互いが非現実的な期待を持つことにもなります。スーパーバイザー側にも、自分は万能なのではなく、限定された役割をとる契約関係にあるのだという自覚が必要だと考えさせられました。しかし、こういった思いも、最後にはユーモアのベールにくるまれました。「悪いスーパービジョンを経験することによって、ニーズが満たされずがんじがらめにされている患者の感情に共感できることになるのだから、良いスーパービジョンもそうでないものも一度体験してみると良い」という言葉です。パーカー博士もまた、質的研究方法論を用いる研究者であって、あらゆる特性を比較の軸にして事象をしっかりとらえる眼を持っておられます。彼のこの冷徹さとその周りに余りあるユーモアのフレアーに、関わる人は「救われる思い」を感じるのだと思います。スーパーバイザーの持つべきもう一つの資質、「余裕」についても考えさせられるワークショップでした。

最後に、パーカーご夫妻は日本人のホスピタリティにとっても感動しておられ、再びの来日を強く希望されていました。学会の主催校はじめ皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。

## —— 教育活動委員会主催・第5回ワークショップ ——

「精神障害者の家族支援と看護」に参加して—事例提供の立場から—

戸田耕一 樋口能視 青本さとみ (福岡病院)

今回の事例検討会に事例提供させていただいた病棟の立場から感想を述べさせていただきたいと思います。

今回のような事例検討会に事例を提出するのは初めてで、準備は正直いって結構大変でした。何をどのくらい伝えたらわかってもらえるか悩みました。結局、話題提供になればと腹をくくって臨みました。でも、提供させていただいて本当によかったと思っています。自分たちの行った介入について、フロアから様々な指摘やアドバイスを頂きケースの理解の視点が広がりました。特に今回のテーマでもあった家族への介入については、家族理解の視点の持ち方や介入の具体的な方法について貴重な意見をもらえたと感謝しています。苦勞のかがあったと思っています。

会自体もやわらかな雰囲気が進み、とても発言しやすい場になっていたと思います。ケースの家族は「要塞家族」とコメント頂きました。確かに、その後関わりを深めるにつれて特徴である、「守り」ということが理解できました。そのような家族に過介入せず、家族の不安を受け止めるようなアプローチに方法を変えていきました。私達の病棟は、急性期治療病棟であり、3ヶ月の入院期間を過ぎてケースは、転棟していきました。そして、8月初旬無事退院となりました。家族は、どちらかといえば不安げでいろいろ判断しかねるところは残ったままでした。このような家族への教育的アプローチをどうしたらいいのかということは今後の課題になると思います。

私達の周りには、このような施設をこえた事例検討の場がまだまだ少ないのが現状です。このような事例検討の機会があればまた参加したいと思っています。

## 新理事長の挨拶「次の10年に向けて」

武井麻子(日本赤十字看護大学)

2000年7月で本学会も創立10年の節目を迎えました。設立当初から中心的に会を引っ張って来られた稲岡文昭先生(現広島赤十字看護大学)、1997年から理事長となられた中山洋子先生(現福島県立医科大学看護学部)に次いで、3人目の理事長という大役を私はお引き受けすることになりました。本学会の発足当時から関わってきたとはいえ、すでに500名を超える会員を擁する中堅学会に成長した今、改めてその責任の重さを痛感しています。

振り返ってみますと、この10年は精神保健看護学にとって大きな変化の年月でした。学会誌の創刊号を開いてみると、そこには「新カリ・ショック」という言葉が見えます。前年の1989年に厚生省の保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則が改訂になり、精神看護学が独立した柱とは認められず、専門基礎科目に「精神保健」が組み込まれるという中途半端なかたちで新カリキュラムが公表されたことによる、主に教員側のショックのことでした。そのため、第1回の学術集会には、何とか精神看護学の必要性を認めてもらわねばという危機感があふれていたのです。

その後、カリキュラムは再び改訂され、看護専門学校にも精神看護学の専任教員を置くことが義務付けられるようになりました。もともと大学や短大には、精神看護学を独立した科目として専任教員を置いているところがほとんどだったので、大学ではカリキュラム自体の影響はさほど大きくはなかったのです。現実には、精神科に就職する大学出の看護婦・士の数は着実に増えてきているのではないのでしょうか。これは本当に喜ばしいことだと思います。

けれど、一方で急激に増加した大学の存在が臨床の場を脅かしてもいます。多くの大学が深刻な教員不足の問題を抱えて、あちこちで「引き抜き」が起こっています。私の勤務している大学でも決して他人事ではないのですが、十分な経験のないままに教員になっていく人たちも不幸ですが、これからというところでせっかく育った臨床家を失ってしまう現場も不幸です。新たなチャレンジを開始しようとした矢先に、当の担当者がいなくなってしまうということもあるのではないのでしょうか。

本学会は当初から精神保健看護学の実践と研究とが遊離することなく、互いに手を携えて発展させていこうという趣旨のもとに発足しました。さまざまな理論や実践報告が海の向こうからやってきますが、やはり日本の文化と歴史に根ざした理論と実践がぜひとも必要なのではないのでしょうか。臨床や地域の現場でも、精神保健福祉法の改正や介護保険法の成立など、大きな変化が起こりつつあります。精神保健看護学の専門家としては、そうした変化に対応しつつ、さらに社会に向けて発言していく義務があるといえるでしょう。

今後の本学会と精神保健看護学の発展に向けて、会員の皆様とともに考え、行動していきたいと思っております。

## 新理事役割

平成12年度第1回理事会(7月5日)において、今期の各理事の役割分担が以下のように決定されましたので、ご報告致します。

- ・理事長 武井麻子
- ・副理事長 柴田恭亮
- ・教育活動委員 羽山由美子、岩瀬信夫、瀧川薫
- ・編集委員 田中美恵子、川添由紀、中川幸子
- ・企画委員 武井麻子、柴田恭亮、江波戸和子、末安民生、田中美恵子(今年度限り)
- ・庶務・会計 出口幸子、小宮敬子(順不同)

なお本学会では、これまで学術集会は、企画委員長が中心的な責任を負う形で開催してきましたが、開催場所が移動するごとに、主催校の事実上の開催責任者と企画委員長が二重に責任を負うという事態が生じることになりました。そのため、外部機関からの問い合わせへの対応が錯綜したり、企画委員長という役職名では主催校での手続き上、責任が不明確になるなど、多くの点で不都合が生じるがありました。そこで、次回の学術集会においては、主催責任者である田中美恵子理事(東京女子医科大学)について「学術集会会長」という名称を使用することが、7月5日の第1回理事会で承認されました。なお、この役職名については、規約に記載されておりませんので、次回第11回日本精神保健看護学会総会において、正式に規約改正を行う予定にしております。会員の皆様には、なにとぞ、ご理解をお願い申し上げます。(文責：庶務)

## 第11回日本精神保健看護学会総会・学術集会のお知らせ

第11回日本精神保健看護学会総会・学術集会は、下記のように開催される予定です。期日・場所の正式な決定は、12月発行の次号ニュースレター(30号)でお知らせ致します。

とき(予定) : 平成13年6月2日(土)、3日(日)

ところ(予定) : 東京女子医科大学(東京都新宿区)

### 《一般演題募集について》

本学会では会員相互の意見・情報の交換、交流を重視し、参加型の学会として、十分なディスカッションの場を設けております。萌芽的研究、実践報告など、研究として発展段階にある演題も大いに歓迎しております。

1. 発表ご希望の方は、次号(第30号)ニュースレターに同封のハガキにて、演題名をお申し込みください。
2. 演題を登録された方には、のちほど抄録用原稿用紙をお送り致します。

## 編集委員会からのお知らせ

日本精神保健看護学会誌第10巻への投稿〆切は、平成12年10月15日(消印有効)です。たくさんのご投稿をお待ちしております。

投稿先 : 〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 東京女子医科大学看護学部内  
日本精神保健看護学会編集委員会(書留郵送でお願い致します。)

### 《ニュースレターへの投稿募集について》

日本精神保健看護学会ニュースレターでは、会員の皆様からの投稿記事を歓迎致します。研究会の案内、海外見聞記、日頃の実践・教育の報告など、ふるってご投稿ください。記事は、おおよそ400字程度にまとめ、原稿にワープロ機種名・ソフト名を記載したフロッピー・ディスクを添えて、上記日本精神保健看護学会・編集委員会宛郵送してください。ニュースレターの各発行月(9月、12月、4月)の一月前までにお送り下さい。

## INFORMATION 長谷川病院公開講座—Pearl Washington 講演会—

長谷川病院ではMenninger Hospital 元看護部長のPearl Washington 氏をお招きし、公開講座を開催いたします。Washington氏はPeplauの人間関係の看護論に造詣が深く、境界例など対人関係上の問題を抱える人々のケアに、長年、関わってきた方です。

日時 : 平成12年11月3日(金)

10:00~12:00 講演会 「精神障害者のアプローチと対人関係論(仮題)」

13:00~16:00 ケーススタディ : 境界例に対する対人アプローチ論(仮題)

場所 : 長谷川病院8Fレクチャーホール 参加費 : 6,000円

参加申込手続き : 下記の申込先に、FAXにて「長谷川病院公開講座 Pearl Washington 講演会参加申し込み」とお書きの上、お名前、連絡先を明記してお申し込みください。なお、参加者が多くなりますとお断りする場合もございますので、あらかじめご了承ください。

参加申込先 : 長谷川病院看護部(担当:秋元) 三鷹市大沢2-20-36 FAX0422-31-8962

### ＜学会へのお問い合わせ・住所等変更手続きについて＞

入会手続き・学会誌のバックナンバーのお求め等、学会に関するお問い合わせは、下記宛てでお願い致します。尚、会員の方で所属先・連絡先等の変更があった場合にも、下記宛てでお知らせ下さいませようお願い申し上げます。

日本精神保健看護学会事務所 : 〒113-8622 文京区本駒込5-16-9

財団法人 日本学会事務センター

TEL 03-5814-5810 FAX 03-5814-5825

\*\*\*\*\*お詫びと訂正\*\*\*\*\*

\* 本年5月に発行致しました日本精神保健看護学会誌第9巻の三宅薫氏の論文表題に誤りがありました。以下のように訂正致しますとともに、深くお詫び申し上げます。 \*

\* (誤) “看護学生の「精神科・精神障害」イメージに関する考察—描画テストを用いて—” \*

\* (正) “看護学生の「精神病・精神障害」イメージに関する考察—描画テストを用いて—” \*

\*\*\*\*\*

(編集委員 : 田中美恵子、中川幸子、川添由紀、若狭紅子、菅原とよ子)